



先生方の疑問に お答えします

お答えいただいた先生



横浜市立義務教育学校
西金沢学園中学部

あべ たくし
阿部 卓



横浜市立西中学校
こまつ たつし
小松 篤史

Q1. 中学校では評価やテストはどのように行っていますか？

A 授業で取り組んできたことを記述のテストやパフォーマンステストで評価するのはラウンドだけでなく、ユニットごとに進める際も同じです。ラウンドでは教科書の進み方が異なるので、それに合わせて1年生のラウンド1では、リスニング中心となります。全ユニットを扱いますが、細かなことは問わず大まかに聞き取り、理解できているか確認します。ラウンドが進むにつれて、正確な理解や表現も確認しています。

K 各ラウンドの最初に生徒と目標と評価規準について確認しています。主な評価材料として、日々のスモールトークの発話やライティングしたものを中心に定期的に評価しています。ペーパーテストでは、授業で身につけた力が測れるように、初耳、初見の英文を用いて出題しています。思考・判断・表現の問題だけでなく知識・技能の問題においても目的・場面・状況があるように問題を設定するように心がけています。また基本的には、テスト形式でのパフォーマンステストや単語テストのようなものは行っていないですが、各ラウンドの最後に、目的・場面・状況を設定した言語活動を行い、そこでのパフォーマンスを評価しています。

Q2. 文法指導をどのように行っていますか？

A たくさん教科書の表現に触れている生徒は、話題に合わせて自分なりに様々な表現を使い始めます。多くの生徒が使い始めたタイミングで、教科書の表現をもとに語順や動詞の形を確認します。確認も基本的には、生徒の気付きを促すように進めています。何度も教科書の表現に触れている生徒は自分たちで教科書から必要な表現を見つけ出し、自分が使っていた形との違いに気付くことができます。

K 基本的に特定の言語材料に関する説明等の指導は、教科書の活動で聞いたり読んだりしたり、スモールトークの Teacher's Talk を聞いたり、場面や状況がある中で意味に気付けるように十分にインプットを与えた上で、インタラクションを通じて生徒に言語材料の形式に目を向けさせてから整理しています。また、産出活動で生徒が話したり書いたりしたものについて、内容面の指導をしっかりと行った上で、言語面について語句や文構造についてフィードバックをしています。

Q3. 帯活動ではどのようなことを意識されていますか？

A 教科書を扱った活動ではたくさんのインプットをしている生徒が、その表現を使ってアウトプットできる機会として会話活動を設定しています。アウトプットが正確な形になるまでには時間が必要ですので、1回1回の会話活動では、生徒も私自身も楽しんで行えるように、内容中心で進めています。中学2年生の秋頃から読解力もつけられるように、初見の文章を読む活動も行っています。

Q4. ラウンドシステムを実施されている上で気を付けていることはありますか？

K ラウンドの活動が活動ベースにならないように気を付けています。そのラウンドでどんな資質・能力を育むのかを意識して授業をしています。例えば、ラウンド2の音文字一致では、文の並べ替えを正解することを目的とした指導にならないように気を付けています。そのため、ラウンドの終了時にはまとめとして、目的・場面・状況のある言語活動を行い生徒が育んだ力を使ってチャレンジするような活動をしています。

また、ストーリーを理解していく上で、繰り返し教科書のストーリーに触れていながら徐々に概要から詳細へ着目できるように、前半のラウンドの方ではあまりストーリーの詳細については確認しないように心がけています。

Q5. どうしてラウンドシステムに挑戦してみようと思ったのですか？

K 始める前は、生徒が英語を学ぶことに対して関心や意欲がなく、授業中は説明を聞いている時間が多く、活動をしたときもやらされている感が伝わってくる様子でした。自分自身も英語の文法を教えることが中心となり、英語を使ったやり取りや言語活動の時間を取ることが少なくなっていました。ラウンドを取り入れたいちばんの理由は生徒が活動する時間を増やしたかったからです。ラウンドをスタートした時には、教師が話す時間が少なくなり、生徒が活動する時間が増えました。また、ラウンドの活動とスモールトークを行ったり来たりすることで、生徒がコミュニケーションを取るための語彙や表現など知識面についても自ら獲得しようとする姿が見られるようになりました。

Q6. ラウンドシステムの魅力は何ですか？

A ラウンドの授業に10年間以上取り組んできましたが、生徒自身がたくさんの活動に取り組み、大量のインプットを通して、少しずつアウトプットが形になっていくラウンドに現在も可能性と魅力を感じています。授業スタイルは一見真似しやすいものとなっていますが、それぞれの学校の生徒に合わせて授業改善していくことも必要となっていて、教師冥利に尽きる面もあります。引き続き目の前に生徒の力がついていくように、授業づくりをしていきたいと思っています。